

## 研究室の国際化事情

—朋あり遠方から来る。亦楽しからずや—

### Recent international affairs in laboratories

金沢大学がん研究所腫瘍分子科学遺伝子発現研究分野

村 上 清 史

研究室のあり方はさまざまな要因によって影響を受けている。最近数年では、情報化と国際化による影響が大きくなっている。

第1は、インターネットの情報網の発達による変化が上げられる。研究国際誌のオンラインサービスは、配達地域と時間差を解消するだけでなく、オンラインで受理した報告を事前に又は電子情報のみで報告する方法は、いち早く研究文献情報を得る大切な方法となりつつある。また、文献情報とゲノムや蛋白の情報がネットワーク上で統合され、急速な進化を遂げている。関連した文献を探し、遺伝情報を見つけ、関連する遺伝子やそれらの蛋白の2次元、3次元の構造情報を得て、それに関する病気や遺伝病の文献を見つけ出す。このような生物情報の統合的なネットワークを有効に利用することは、研究にとって不可欠な構成要素になってきた。研究情報やデータベースの検索と解析ソフトの有効利用が、求められる研究能力の一部となっている。検索の処理速度やネットワークのリンクの有効性から見て、現状では、アメリカのNIHやNCIのweb siteが日本のsitesより遥かに効率が良い。インターネットを用いたネットワークの充実と共に、関連する研究者間交流が電子メールとWeb siteを用いて効率的に働いている。電子メールで研究材料をどこからでも請求でき、また請求もされる。場所と時間の制限を越えた自由な研究交流の仕掛けが整ってきた。国際的な研究費助成応募と申請をWeb siteの上で行うと、一人の研究者の呼び掛けで数カ国の研究者がグループを構成し、数日の間に研究助成の申請を終えてしまうことが可能となった。このような事態は、研究成果の独創性や価値が評価されやすい環境に変わったことを意味する。国際会議に積極的にでかけ、成果を公表し、情報を交換する「顔と顔」の接触と、ネットを用いた国際的な交流が相互に補完している。

第2は留学生の増加である。大学院生の中で日本人より留学生の方が多くなっているラボも生まれて来た。アジア近隣諸国からの留学生は、多くの場合には大学院卒業後はアメリカでポストドクの位置を得ることを希望し

ている。受け入れる教官の側から見ると、一定期間の中で博士号を取得させる責任が求められ、更には経済的負担を負う必要も出てくる。このような事態の中で、受け入れの教官は選択の基準を持つことが望ましい。例えば、なぜこのラボで学びたいかを問い合わせることが必要である。研究能力や学力による選択の目的からも、論文や総説を送って、コメントを求めるなどの方法もある。選択の項目に英語能力を加えることが望ましい。英語の能力と一般学力とは、多くの場合相関している。他方、教官の側としては、研究紹介や研究成果を英語のホームページ上で開示することが重要である。日本人のみならず、外国からもWeb siteから留学先を探す例が増えている。教官として、受け入れの条件を受け入れ前に明瞭に説明し、必要な事項について書面の合意をとることが、問題をこじらせないために必要と思われる。複数の留学生を受け入れることも増えているので、受け入れ条件に関しては公開できる基準が望ましい。異なった条件で受け入れる場合には、その根拠が明かとすることが望ましい。医学研究科としても、奨学金や助成金を得る留学生を選定する基準と方法は、留学生に公開されていることが緊要と考える。受け入れ側にとって、「ことば」の問題が大きい。日本語を共通語とするか、英語を共通語とするかは、一長一短があり悩ませる問題である。研究の情報源は英語であり、将来のポストを考えると英語を「使用言語」とすることが、医科学の領域では期待されると考える。この場合には、留学生は日本語が上達せず、日本の文化を学ぶ機会が少なくなる。他方日本語を「使用言語」にした場合には、留学生は、英語と日本語の両方をマスターすることが求められ、かなり厳しい要求となる。昨年秋からスタートした英語特別コースの開設が、自然科学や医薬系の留学生にとって、適切なコースとなることが期待される。

さまざまな国の留学生に、多様な受け入れのあり方があって良いと思う。同時に、留学生にとっても研究室にとっても「朋あり遠方から来る。亦楽しからずや」と感じられるような環境が熟成されることが望まれる。